五四運動前後における周作人[1]のヒューマニズム
―「人の文学」の考察を中心に―

鄭　恵

キーワード　*人、ヒューマニズム、人間性、新青年、ブレイク*

一、はじめに：

周作人（1885－1967）は五四運動の先駆的思想家であり、新文化運動における典型的な知識人の一人である。周知の通り、五四運動は新文化運動といわれ、科学や民主主義の重視、文字及び文学改革などがその内容としていた。当時、周は日本の「新しき村」運動の影響を受け、中国で同じようなヒューマニズム運動を行なった。この運動はまもなく失敗したが、多くの青年たち[2]に影響を与えた。

また、周作人は彼のヒューマニズム思想を『新青年』で発表した。五四運動直前に、周作人の代表作である「人の文学」は陳独秀に評価されて、『新青年』に掲載された。この作品は、中国初の重要な近代文学理論と見なされている。郁達夫（1896－1945）[3]が「五四運動の最大の成功は「個人」の発見だ。以前の人は君のため、道のために、父母のために生きているのだが、現在の人は自分のために生きているんだ。」[4]と述べているように、「人の文学」は五四新文化運動の発展方向を初めて明確化し、以降の新文学の誕生に重要な基本理論を提供した。発表後、当時の文学青年の一人であった博斯年[5]はこの文章について次のように書いている。「『人の文学』を読んで、私は極めて感服した。白話文学の中心は彼が言ったヒューマニズムだ。」[6]

周作人のヒューマニズム運動の実践と中国における「新しき村」の展開についての先行研究はかなりある。董炳月は2008年に発表した『新しき村から「大東亜戦争」へ 周作人と武者小路実篤との比較研究』で、周作人の「新しき村」の継承と発展について詳しく論じている。

一方、周作人のヒューマニズム思想の代表的論文「人の文学」を中心とする研究も少なくない。その中で最新の研究書である『周作人平議』では、文学史の視点から「人の文学」と陳独秀（1879－1942）や胡適（1891－1962）の文学理論との比較を行い、評価している。また、曹而雲は白話運動の視点から「人

の文学」の意義に言及している。[7] しかし、これらの先行研究は、「人の文学」の成立、その社会背景、思想的源流などには注目していない。そこで、本稿では「人の文学」というタイトルに含まれる「人」という用語に焦点を当てて、当時の周のヒューマニズムを考察したい。

二、周作人のヒューマニズムへの関心

八十二歳まで生きた周作人は、清末から戦争混乱の時期を経て中華人民共和国の成立や文化革命を経験した。彼は中国近代史の展開に従って波乱万丈の人生を送ったと言えるであろう。しかしながら、この動乱の中で周作人は学者として書斎に閉じ込もったまま、数多くの作品を残した。彼の研究分野は民俗学、文学、人類学などに及び、非常に幅広い。ここで周作人のヒューマニズム思想と言っているものは、彼自身によって言及されているわけではなく、彼の様々な研究活動や著作に潜在しているものである。そこでまず、周の主な研究成果に見られるヒューマニズムについて略述する。

1. エリス[8]の性の心理学

周作人が日本留学中に読んだ本の中で最も感銘を受けたのは、エリス［Henry Havelock Ellis］（1859－1939）の『性の心理学』である。彼は1924年に「エリスは最も私の感服した思想家の一人だ」[9] と記している。エリスは性欲について、禁欲でも貪欲でもなく、均衡を保つことを提起し合理的な性欲を認めた。つまり、禁欲と貪欲を否定し、人間の自然な性欲の発揮を認めるべきだということである。

周作人はエリスの理論について次のように論じた。「エリスはこの問題（禁欲と貪欲の調和）に対して非常にすぐれた意見を有している。彼は宗教的な禁欲主義を排斥するが、禁欲もまた人間性の一面であり、歓楽と節制の両者は併存し、しかも相反するのではなく実は補い合うと考えている。人間には禁欲の傾向があって、それによって歓楽の過多を防ぎ、さらにそれで快楽の程度を増加させる。」[10]

つまり、人間には「貪欲」という動物的な本性があり、「禁欲」という知性も持っているというのである。したがって、人間は「肉」と「霊」の合一であることがわかる。このような理論は周のヒューマニズム思想と合致している。彼は人という動物の本能を認めると同時に人間の知性も求め、人間はこの両方を調和させるべきだと強調した。

2. トルストイの思想

周作人は日本の作家武者小路実篤（1885－1976）と深い親交があった。二人は1919年、1934年、1941年、1943年と合計四回の議論を交わしている。彼は「武者先生と私」[11]という雑記に武者小路との交流を詳述している。1943年に武者小路が北京の周の自宅を訪ねた折に、周は彼に漢の磚硯を送ったというエピソードが残っているほどである。

周知のように武者小路は白樺派のリーダー的存在である。白樺派の特徴は、トルストイ（1828－1910）の影響を受け、理想主義的人道主義の立場によって、それぞれの個性・自我を尊重したことである。しかし、彼はトルストイの自己犠牲思想から離れ、自己を生かすための自己肯定の姿勢に傾いていった。

五四運動での周作人の活躍の方向も白樺派の影響を強く受けているといわざるを得ない。それは以下のような事実からも確認できる。武者小路はトルストイの価値観を学び、それを具現化するものとして「新しき村」を1918年に宮崎県に建設した。周作人は1919年の秋（五四運動開始の直後）に、その「新しき村」へ武者小路を訪れた。そして、その後、1919年から1920年の間に「新しき村」について八篇の文章[12]を書き、日本の「新しき村」を熱心に紹介した。これが当時の『新青年』同人と文学青年[13]に大きな影響を与えたのである。

この八篇の文章の一篇である「日本の新しき村」で、周作人はトルストイについて次のように論じている。「ロシアのトルストイは普遍の労働を実施したが、『手の仕事』に集中し、『脳の仕事』を排斥した。また、彼は極端な利他主義を提唱し、個々人の責任を抹殺したため、完璧とはいえない。」[14]

これに対して、彼は「新しき村」の運動を高く評価した。「新しき村運動は普遍の労働を主張しながら協働する共同生活を提唱している。これは人類の義務を尽くし、かつ個人の義務をも尽くすということである。協働を賛美し、個性をも賛美している。共同の精神を発展させ、自由の精神も発展させる。これは実現できる理想で、真の普遍的な人生の至福である。」[15]

周作人は「新しき村」の実現に非常に期待していた。「新しき村」を肯定する彼の力強い言葉からそのヒューマニズム思想が窺えるであろう。「人類の運命は万人の希望によって転変する。現在における万人の希望はまさしく人類の最も正当で自然な意志である。そのため、このような社会は将来必ず実現できる。そして、必ず実現する。」[16]人類への関心は周のヒューマニズムの特徴で、彼は自国だけに固執せず、広い目で他国の現状、文化から人類全体の運命まで幅広く考察した。このような人類の運命への情熱的関心に基づいて救国を決心した周作人は、間接的なトルストイ主義の実践者として、日本の「新しき村」を学び、中国でそれを実践しようとした。このような計画は失敗したが、周個

人の思想的人生に大きな影響を与えたのは確かである。

3. 柳田国男の民俗思想

周作人は1906年日本へ留学し、東京の法政大学、立教大学で学び、1911年の夏に帰国した。周は帰国直後、中国の民謡を収集し始め、本格的な民俗学運動を開始した。それは周作人の留学中に読んだ柳田国男の著作の影響と切り離して考えることはできない。彼の中国民俗学に対する貢献は、主に柳田による日本民俗と民俗学の紹介に始まり、中国民俗学創立のための尽力にあった。

周作人は帰国後から民俗学の研究をずっと継続していた。1913年から1915年の初春まで、周作人は200余もの紹興の民謡を集めた。彼はまた、1913年に『児歌之研究』という文を書き、その中で、「幼児教育は自然に従って成長を助けるべきで、歌謡遊戯を主な科目とする。童謡のたわいなさ、童話の荒唐さはみな取るべきものである」と述べ、文中で初めて「民俗学」という概念を用いた。

1917年、周作人は紹興に別れを告げ、北京大学に赴いて文科の教授の任に就いた。1918年2月、彼と劉半農、沈尹黙、銭玄同、沈兼士らが発起人として、北京大学の嵐のような歌謡収集活動が始まった。この活動で彼は国外の民俗学研究の見解と知識を紹介し、大胆な自分の見解を発表している。そして民族の発展における民俗研究の意義を指摘し、民俗学の研究方法を提起している。彼の早期の民俗学活動は、中国の現代民俗学の創立において、創始的意義を有している。[17]

周作人は「私の雑学」で日本民俗学の研究の動機について次のように述べている。「日本事情を理解するために、文学芸術の面を長い間研究した後で、倍の労力をかけているのに半分の成果しかあがらないと感じた。国民の感情生活に着手しなければ、手がかりが見付からない。」[18]つまり、周は日本民俗学を研究する動機の一つを、国民の感情生活を考えることだとしていたのである。また、彼は人類学研究の動機についても、「人類学に興味を持つのは学ぶためではなく、人のためなのである。また、人はもともと文化の起源である。」[19]と述べている。

周作人の膨大で、複雑な文化思想的著述には、上述したことからも明らかなように、常にヒューマニズムが隠れている。そして本論で取り上げる周作人の代表作「人の文学」は、彼のヒューマニズム思想が初めて明らかに提唱された文章である。また、周作人のヒューマニズム思想の焦点は「人の文学」の「人」に当っている。この「人」の分析から彼のヒューマニズムの内容とその傾向が窺える。

三、「人の文学」について

1. 「人の文学」の概要

周作人は1918年12月15日の『新青年』で「人の文学」を発表し、この作品は五四運動のヒューマニズムの誕生に大きな影響を与えた。

周作人は文章の冒頭で「現在、我々が提唱すべきな新文学とは、一言でいえば、『人の文学』である。」[20]と新文学を定義した。次に、「人」についての理論を、ヒューマニズムの歴史と「人」の意味の二つの面から展開した。周作人はヒューマニズムの歴史について、次のようにまとめている。[21]

ヨーロッパにおける「人」に関する真理の発見は、一回目は15世紀ごろの宗教改革とルネサンスのできごと、二回目はフランス革命、三回目はヨーロッパ戦争から以後のことである。

また、「人」の意味についてはブレイクの著作『天国と地獄の結婚』の次の文を引用している。[22]

第一、人間は精神から離れた肉体を持ってはいない。何故なら肉体と呼ばれるものも精神の一部であって、それはこの世では精神の主要な関門である五感によって認知される。

第二、精力こそ唯一の生命であって、それは肉体から出るのである。理性は只精力の限界若しくは外周に過ぎぬ。

第三、精力は永遠の歓喜である。

周作人は以上のような「人」の解釈に基づいて、彼自身のヒューマニズム理論を次のように説明している。「私がいったヒューマニズムとは衆生済度のような理論ではなく、個人主義の人間本位主義である。第一に、人が人類の中にいることは一株の木が森にあると同様である。第二に、個人が人類を愛するのは人類に自我があって、その自我と関わるからなのである。」[23]

このような「人」の解釈の後で、周作人は文学に話題を転じる。彼は文学に「非人の文学」[24]があると指摘し、十種類の「非人の文学」[25]を挙げる。その上で、「人の文学」のジャンルである男女の愛情、親子の愛情について詳しく論じるのである。

この文章の最後で、周作人は自身のヒューマニズム思想について次のようにまとめている。「人が苦しいと感じるなら、私も必ず感じる。この苦しみには

彼（人）が遭遇すれば、私が必ずしも遭遇しない。それは人類の運命は同一で、私は自分の運命を考慮すると同時に人類共同の運命を考慮しなければならないのである。」[26]

2. 周作人の「人」解釈――「人」の歴史

以上の概要から、周作人の「人」解釈には二つの系譜があると思われる。まず、彼は「人」の歴史を通じて解釈した。その次に、「人」の定義を通じて記述した。周のヒューマニズムを考察するために、この二つの系譜を分析しなければならない。まず、「人」の歴史から論じる。

周は「人の文学」の概要でヒューマニズムの歴史について述べている。周知の通り、彼は日本留学中に大量の西洋文学書を読み込んだ。このことから、彼はヒューマニズムの源流を深く理解したものと思われる。

周が目指したのは主に近代ヒューマニズムの歴史であろう。近代ヒューマニズムはイタリア・ルネサンスに始まる。ルネサンスは中世キリスト教の宗教文化に対抗して、古代ギリシャ・ローマ文化の復興再生を求める運動である。即ち、キリスト教的教権万能の思想に反抗し、教会によって抑圧されてきた人間精神の解放を求めようとする人文主義的精神運動である。

また、周作人は進化論の立場からも人と動物を区別して「人」を尊重する理由を述べた。「人は生活を改造する力を持っている」[27]からである。そのため、「人間性に違反する一切の習慣制度は排斥し、改正すべきである」[28]とも述べている。このように周作人はヒューマニズム思想を解釈した。[29]

3. 周作人の「人」解釈――「人」の定義

周作人の「人」解釈のもう一つの系譜として先に引用したブレイクの「人」、「人間」観がある。ブレイクの思想に初めて接し、その強烈な文体に感動した徐志摩[30]は、中国におけるロマン主義的文学を創造し、数多くの名作を残し、ロマン派の代表的な詩人になった。しかし、ブレイクの人文主義思想に初めて着目したのは周作人である。周が『ブレイク詩選』を読んだのは、五四運動前の1917年12月であった。[31]周作人は「人」の解釈において、先に引用したブレイクの説を妥当なものと考えている。

ブレイクの詩の原文において「人」には「man」が使われている。[32]「man」とは動物と対比して、知恵があるものである。[33]つまり、「人」は動物の獣性をもっているが、動物より知恵をもっている。創世紀の英訳には「God created man in his own image, in the image of God created he him; male and female created he them. (Gen.)」[34]とあり、「man」は「人」一般を意味している。「man」の語源

はラテン語の「homo」[35]であり、「human」と同じ語源である。「human」は「man」に属し、「man」としての特徴、「人間の、人間らしい」を意味する。

日本でのブレイク研究の嚆矢となった柳宗悦によると、ブレイクは「想像」即ち'Imagination'、「霊感」即ち'Poetic Inspiration' によって詩を創作した。ブレイクは「ジェルーサレム」で「自分は身を震はし乍ら書も夜も座っている。自分は偉大な仕事を果たす為に休憩する術を知らない。それは永遠の世界を開く為である。人間内部の不死の眼を思想の世界に開く為である。神の御胸即ち人間の想像に、限りなく広がる永遠界に人々を活かす為である。」[36]と書いている。

柳は、この中の「人間の想像」とはブレイクにとって直ちに神の世界又は自然の根本的実在界を意味すると解釈している。それは人生の奥底に潜む真の生命即ち真如の世界に外ならなかった。想像の生活とは自己と神との直接的合一'Immediate Communion'だった。彼の宗教的思想の核心はいつも茲に集まっている。自我と自然と、心と物とが互いに触れて両者が渾然とした一つの価値的事実に移る時、そこに実在の世界、言い換えれば神の世界が現れる。[37]このように、人間は想像によって神に接触するのである。これがまさしくキリスト教神秘主義の主旨である。しかし、「彼の芸術は凡てこの人間に対する深い愛から沸いていた」。[38]そのため、「彼は根本的な人本主義者humanist」[39]だと見なしている。つまり、周作人の「人」の定義はブレークの「man」の解釈、すなわちキリスト教的な「man」の解釈に基づいている。

4. 周作人の独特のヒューマニスム

以上の二つの系譜に基づいて周作人の独特のヒューマニズムが形成された。これはキリスト的かつ人文主義的解釈と「人文主義」二つの意味を併存しているヒューマニズムである。

周作人は以上の「人」の解釈から「人」の理想的生活について次のように記述している。第一に、利己的であると同時に利他的である生活であること、第二に、人間の道徳は愛、智、信、勇に基づいて幸福が得られる生活であることである。[40]「利己的かつ利他的」[41]という記述から周の個人主義の傾向が窺える。周自身の解釈によればこのような個人主義は「人間本位主義」[42]である。

「人間本位主義」という個人主義を、周は文学表現における男女の愛情を例として解釈した。周の主張は二つある。一つは男女平等、もう一つは恋愛を前提とした結婚である。即ち、周は「人間性」を尊重した上で、個人主義を提唱するのである。

5. 「人」の類語

周作人は「人の文学」だけでヒューマニズムを提唱したわけではなく、「平民の文学」や「民衆の詩歌」などの文章でもヒューマニズムを強調したが、「平民」、「民衆」といった言葉もよく使っている。「人」は「人間性」があるため、人間の平等を認めざるを得ない。したがって、人一般を意味する「平民」、「民衆」が頻繁に出たのである。

このような言葉は中国戦国時代（BC722－481）においてすでに使われている。『書呂刑』には「蚩尤惟始作乱、延及与平民。」と書かれている。[43]これは初めて「平民」という言葉が記されたものである。また、『公羊伝』の「趙穿縁民衆不説、起弑霊公。」で「民衆」という語が見られる。[44]この二つの出典からみると、「平民」・「民衆」とは君主が政治を行う対象である。しかし、「人の文学」での「人」の再認識によって、「平民」・「民衆」の社会における地位、影響力は変わってくるのである。つまり、人間性によって人間が平等になり、平民・民衆向けの文学が当然、現代文学の読者集団に含まれるようになる。

四、五四運動の歴史背景から見たヒューマニズム

現代の著名な歴史学研究者である黄仁宇は、五四運動の形成について次のように解釈している。[45]

科挙試験が1905年に廃止されたが、社会はそれにしたがって改造されていなかった。1919年までに、新式な工場内の労働者は100万人～250万人である。まだ多元化されていない経済体制には提供される職業も限られている。特に、専門職業は通商開港に集中している。進路が見えないため、知識人は旧来の社会習慣に戻るのが普通である。そのため、知識人は昔の官僚制度に望んで、彼らが官僚集団の継承者と認識して、社会制度では特権を持つ資格があると思っている。要するに、社会に不満を持っている知識人は五四運動の先発者となったのである。

黄は経済発展の立場から五四運動の歴史背景を考察している。近代中国の社会制度の変化によって、知識人のアイデンティティは、いわゆる伝統的な士大夫階級から新興の知識人に変容する。この過程で、知識人は自身の価値観や思想や審美観など各方面での変容を迫られた。また、西洋文化の輸入は知識人に危機感を与えた。そのため、西洋と日本に留学したエリート知識人集団は、当時の西洋の個人主義的思想を利用して、中国の封建制度に抵抗した。したがっ

て、「人」或いは「人間」を再発見しなければならなかったのである。周は「人の文学」を通して、「人間」に新しい定義を見出し、多くの知識人の指針を提供したのである。

五、「人」についての『新青年』同人の認識

周作人の「人の文学」が発表される前に、『新青年』同人たちは「新文学」とは何かについて様々な議論を行っていた。その中では、「人」の概念が明確ではなかったが、封建社会に批判的なヒューマニズムに近い概念がすでに現れていた。胡適や陳独秀は封建制度を「奴隷性の思想」と呼び、特に陳独秀は「自分自身の知能に従うべきであり、他人への従属を拒絶すべきである」[46]と封建社会の「奴隷性」に対して強烈に反発した。ただし、彼らの主張は封建社会の「非人」的奴隷性に焦点を当てており、「人間性」或いは「人」の根本的な意味については問題にしていなかったのである。

しかしながら、『新青年』第一巻・第二号に掲載された李亦氏の「人生唯一の目的」は人間の定義を通して、初めて個人主義を大胆に主張した。文章中、西洋のヒューマニズムについて李は次のように述べている。「ヨーロッパでは唯物主義哲学が誕生して以来、知識人にとっての人間の目的は幸福であり、快楽であると提唱した。（中略）自然な人間性に従う正々堂々とした個人主義を前提として、社会のマラルが個人の利益を得る手段となる。群と己との関係を解明しなければ、集団とは言えない。公私の権利を解明しなければ、公益とも言えない。」[47]李は、西洋社会の基礎は個人主義だと認識したのである。

一方、李の文章には個人主義に反対する論調も見られる。「人間とは人間と物のために生きてきたものである。それを前提とするならば、人間の第二の目的とは人を愛し、人に利する、物を愛し、物に利することである。」[48]

ここで「物」というのは現実的な社会制度、人間関係、伝統的な家族制度を指していると思われる。李は、伝統や社会制度を守るために人間性の自然をなくし、快楽の代わりに苦痛を得るのは、天賦の権利が失われたことを意味すると述べている。この文章は1915年に発表されており、周の「人の文学」より早い。李の論は人間の基本的な権利を尊重し、「個人」の満足・快楽・幸福などを強調し、人間の独立性を主張した個人主義である。

これに対して、周は初めて「人」の根本的な意義から説きおこし、「肉」と「霊」の合一という解釈を通じて「人間性」の存在を明らかにした。この意味で、周の「人の文学」は本格的なヒューマニズム論であり、彼はヒューマニズ

ムに基づいて近代文学の成立基盤となる理論を呈示したのである。

六、武者小路と周作人の比較

二－2で述べたように、周作人は同時代の日本ヒューマニズム文学集団である白樺派の武者小路と親交を結んでいた。周の日記には白樺派の雑誌『白樺』入手の日付も残されている。

武者小路は『新しき村』で「自分の人生観」を発表した。その中で、個人と国家、人類、神の関係を記述した。「個人の本能は国家的本能に、国家的本能は人類的本能に、人類的本能は神の本能に、自らを謙遜して調和するように骨折らねばならぬ。（中略）人類的本能や神的本能を生かさずには個人は救われない。人類にたいする自分の義務を果たし、兄弟と、神、真理、愛、正義、美を愛する本能をますます生かしてゆくことによって、個人は死に打ちかち、自己を不滅のものに結び付けることが出来る。その道を邪魔するものは、神と人類に『それはよくない』と云われる。」[49]つまり、個人、国家、人類、神は逐次に影響するのである。

しかし、武者小路は人類の本能は個人の本能以上にあるものだと考えている。「人間には個人や国家の本能に包まれない、更に深い本能がある。即ち自分の言う人類的本能である。（中略）この本能から生まれたものは、世界中の人が同感を起こし或いは賛美し、或いは感謝し、或いは憂いを共にする。」この点について、武者小路は次のように解釈した。「賢人、聖人、仁者といわれる人は自分の利益よりは、真理を愛し、正義を愛し、国家のためを思っても真理を曲げはしない。いくら自国の利益になることでも、不正なことの不正を黙認するわけにはいかない。それは国家の為を思わないというよりも人類の為を思うのである。」[50]

また、武者小路は神と「人」（人間）の関係について次のように記述している。「我等は人間としてできるだけ円満な肉体を持ちたく思う。それ以上円満な精神を持ちたく思う。それがつまり人間の想像し得る神に自分を近づけることになる。神は人間以上でなく、極度に完成された人間そのものであると言ってもいいのではないかと思う。」[51]武者小路にとって、この「極度に完成された人間像」は神の化身であり、神とは人間に基づいて想像された、人間の「理想像」である。

人間は個人の本能、国家の本能を超えて人類の本能、神の本能をめざさなければならない。そのようにして初めて、個人の本能は死を克服し、自己を不滅

のものとすることができるのである。したがって、彼のヒューマニズムは人類愛を基盤として、個人主義を実現するものである。しかし、「人の文学」で体現された周作人のヒューマニズムは「人」の根本的な意味から成り立つものであり、「国家」、「人類」の概念を経由していない。ところが、二―2に書いたように、武者小路の「新しき村」の実践は周作人に影響を与えていないとは思われない。

七、まとめ

本稿では、周作人のヒューマニズムを「人の文学」の「人」を中心として考察した。周作人は西欧の「人」（人間観）から近代ヒューマニズムの道徳を解釈し、これを通じて中国近代文学理論の成立に大きな役割を果たした。この文章は周の最初の文芸理論であり、近代ヒューマニズムについての概論とも言える。彼は「人」を解釈するに当たり、「人間本位主義」というヒューマニズムを提起した。この時点ではヒューマニズムの立場から文学理論を提唱したため、「個人主義」の傾向はまだはっきりとしていなかった。五四運動後、周のヒューマニズム的文芸理論は徐々に個人主義の道へ踏み込んでいく。1926年に書かれた文章では、彼の個人主義的傾向が既に著しく現れている。「私はいまでも日本の新しき村の友達を尊敬しているが、このような生活は自分の趣味を満足させる以外に意味はない。人道主義の文学もそうである。自分の趣味を満足させることがすでにこのような生活や文学を営む理由なのである。」[52]

このように、ヒューマニズムから「個人主義」へ傾いていく過程において、彼が当時の日本文学界から影響を受けたことは見逃すことができないであろう。つまり、白樺派の文学思想は、彼の思想変化の一つの非常に重要な要因であると思われる。そのため、周と白樺派の関係をさらに深く考察する必要がある。日本初のブレイク研究者でもあり、白樺派の代表的人物である柳宗悦はこの詩人について一冊の大著『ウィリアム・ブレイク』[53]を発表した。柳はブレイクについて次のように評価している。「ブレイクはそれらの断言によって禁欲の宗教に第一の矢を放っている。恐らく彼は精神と肉体との合一を主張し地獄の声を天国に聞かせた最初の又最高の詩人である。」[54]柳は『天国と地獄の結婚』を翻訳し、研究した。

他方、周作人が活躍した時代の政治、社会の状況もまた彼のヒューマニズム思想形成に影響を及ぼした要素である。五四運動前後の周がさまざまな事件に遭遇したことに鑑みて、今後は歴史背景や人間関係などの方面から彼の思想の

変化を考察しなければならない。

注：

1　周作人：現代中国の散文作家、翻訳家。魯迅の弟。
2　毛沢東、蔡和森（共産党早期のリーダーの一人、中央委員）、惲代英（中国社会主義青年団団長、宣伝部部長）など。
3　郁達夫：中国の小説家。大正2年（1913）来日。東京帝大在学中に郭沫若らと創造社を結成、「沈淪」でみとめられる。帰国後は各地の大学で教えながら作品を発表。のち抗日救国運動で活躍するが、1945年9月17日スマトラで日本憲兵に殺された。
4　郁達夫　『中国新文学大系・散文二集序』1935年
5　博斯年（1896年－1950年）：現代文学家、歴史学者、教育家。1927年から1937年まで中山大学、北京大学で教授を歴任した。
6　博斯年　『白話文学与心理的革命』『博斯年全集』第四巻　132頁
7　曹而雲　『白話文体与現代性』三聯書店　2006年
8　エリス：イギリスの医者・著述家。性を科学的に考察、その体系化に努めて、性科学を創始した。著『性の心理学的研究』など。
9　周作人「エリスの話」『周作人散文全集』第三巻　広西師範大学出版社　345頁
10　周作人「生活の芸術」『周作人散文全集』第三巻　広西師範大学出版社　513頁
11　周作人『周作人精選集』北京燕山出版社　2009年　265頁
12　「日本の新しき村」（1919年3月15日）
「日本新しき村の訪問記」（1919年10月30日）
「新しき村の精神」（1919年11月23日）
「新しき村運動の解説」（1920年１月24日）
「新しき村北京支部啓示」（1920年3月１日）
「工学主義と新しき村の討論」（1920年3月28日）
「新しき村の理想と実際」（1920年6月23、24日）
「新しき村の討論」（1920年12月26日）
13　1920年12月４日に、北京大学の臨時職員であった毛沢東は「新しき村」について周作人に尋ねた。この時、毛は湖南省沙差岳麓山で「新しき村」の建設を計画したが、この計画は実施に移す過程で盗難事件が起こったため

まもなく失敗に帰した。

14　周作人「日本の新しき村」『周作人散文全集』第二巻、広西師範大学出版社　134頁～145頁

15　同前

16　同前

17　同前

18　周作人「私の雑学」『周作人精選集』北京燕山出版社　2009年　31頁～49頁

19　同前

20　周作人「人的文学」『新青年』第五巻六号　85～93頁

21　同前

22　柳宗悦注訳『ブレークの言葉』業文閣　1921年　89頁

23　周作人「人的文学」『新青年』第五巻六号　85～93頁

24　同前

25　①色情書類
②迷信の鬼神書類
③神仙書類
④妖怪書類
⑤奴隷書類
⑥強盗書類
⑦才子佳人書類
⑧下流の諧謔書類
⑨黒幕類
⑩以上各種思想の結合された旧劇

26　周作人「人的文学」『新青年』第五巻六号　85～93頁

27　同前

28　同前

29　OEDによれば、「ヒューマニズム」という言葉には二つの意味がある。一つはキリストに人間性のみを認めるキリスト教の一つの教義、もう一つはいわゆるヒューマニズム、人文主義である。[29]ヒューマニズムの歴史と進化論の説明を通じて「人」を解釈する周作人はもちろん後者を継承する。

30　徐志摩（1897年～1931年）現代詩人、散文家。新月派の代表詩人。1918年、アメリカ留学。1921年にイギリス留学、ケンブリッジ大学に入学。欧米ロマン主義と耽美主義の影響をうけた。イギリスロマン主義詩人であるブレイクの作品に感動し、同名詩集『猛虎集』を創作した。

31　周作人『周作人日記上』大象出版社　1996年　722頁
32　松島正一編『対訳ブレイク詩集』岩波書店　2004年
33　Would refer to intelligence as the distinctive characteristic of human beings as contrasted with brutes.
34　翻訳：神其像(かたち)の如くに人を創造りたまへり即ち神の像の如くに之を創造り之を男と女に創造りたまへり。
35　『The Oxford English Dictionary』Oxford at the Clarendon press
36　柳宗悦『柳宗悦全集』第四巻　304頁～ 305頁
37　同前
38　同前
39　同前
40　同前
41　同前
42　同前
43　『辞源』商務印書館　1915年
44　同前
45　黄仁宇　『中国大歴史』　三聯書店　1997年　301頁
46　陳独秀　「警告青年」『新青年』　第一巻一号
47　同前
48　同前
49　武者小路実篤『新しき村』日本書房　1964年　160 ～ 192頁
50　同前
51　武者小路実篤『人間論』人文書院　1956年　191頁
52　周作人「『芸術と生活』の序」『周作人散文全集』広西師範大学出版社　第四巻
53　柳宗悦「地獄の歌」『柳宗悦全集第四巻』筑摩書房　1981年92頁～ 107頁
54　同前

参考文献：

黄仁宇　『中国大歴史』　三聯書店　1997年
曹而雲　『白話文体与現代性』三聯書店　2006年
董炳月　『「国民作家」的立場』三聯書店　2006年
張鉄栄　『周作人平議』上海遠東出版社　2010年

周作人 『周作人日記上』 大象出版社 1996年
周作人 『周作人散文全集』 広西師範大学出版社 2009年
寺澤芳雄 『英語語源辞書』研究社 1997年
『The Oxford English Dictionary』Oxford at the Clarendon press